

ハーバート・リード

——その「叛骨」をめぐる——

糸 藤 洋

はじめに

第二次大戦が終結し、その硝煙が晴れ上るに従つて、変貌した世界のすがたが次第に明かになつて来た。思想的鎖国の状態で、壘棧敷に押し込められていた私達の耳に、英国文壇の消息が再び入るようになった時には、そこにも顕著な変化が見られた。そのさまを概観して、増野正衛教授は次のような鳥瞰図を試みて居られる。

一九二〇年代の英国思想界を浪漫派と古典派とに二分して、両派の象徴的な位置に立つて尖鋭な論戦を展開したJ・M・マリとT・S・エリオットとが、現在すでにそれぞれアカデミックな学究の生活にアングロ・カトリックの信仰の生活に安住の境涯を見出しつつあり、彼らより後の世代に属するマイケル・ロバーツやW・H・オーデン、C・D・ルイス、ステイーヴン・スペンダーらも、第二次大戦の勃発を契機として前衛的な活動に一応の終止符を打ち、ある者は教育界に、ある者はアメリカ

カへ、あるいは大学の研究室へと、それぞれに転身を完了しているときに、ひとりリードのみが老来ますます熾烈な闘志をかき立てて、時代の否定的精神としての役割を果しつつづけているのを見る……(註1)

こゝにもクローズ・アップされているリードの特異なあり方を、増野教授は「叛骨」として捉え、そのよつて来る所以を明かにして、「苗床」はリードの少年期の生活環境にありとされている。私は増野教授の所論に疑義を挟むものではなく、沉んや反論を挑むものでは勿論なく、かえつて、賛意を表し、それによつて啓発された点について謝意を捧げるものであるが、何人の眼にも顕著であるリードの特異なあり方について、別の角度から、私なりに光を投じて、詩人の魂の秘密の解明に——蛇足でなければよいがと念じつつ——幾分かでも密与する事を望んで、このささやかな論考の筆を執る次第である。

(註1) 増野正衛「叛骨の苗床——少年期のハーバート・リード」。京都、山口書店発行「海潮音」Vol. VI, pp. 28-29

ルネサンスおよび宗教改革を通じて把握された個人自由のイデオロギーの、政治的実現であるとされる近代国家^(註3)は、レセ・フェールを標榜するその経済的基礎構造が末期的に行詰りに陥るとともに、方向転換を余儀なくせられる。嘗てトマス・ホッブス(Thomas Hobbes 1588—1679)は国家と王との強大な権力を旧約聖書イザヤ書にその名を記された怪物レビヤタンにたとえたが、今や独占資本がその特権的地位を守りぬくために、ファシズム政権の手に国家の全権力を集中し、ホッブスのレビヤタンにもまさる巨大なしかも執拗な支配力を振り、自由主義のイデオロギ―を蹴飛ばして、個人の自由の最後の一片までも奪い取ろうとするのである。このようなファシズムの擡頭に遭遇し、伝統的精神の支柱が覆えされるのを眼の前に見て、一九三〇年代のヨーロッパは危機感の重圧に喘いだ。

ロマン・ロラン(Romain Rolland 1866—1944)は「魅せられる魂」の中で、ファシズムの嵐の中に置かれた一人の良心的なイタリアの知性人、ブルーノ・キアレンツァの運命を辿るにいたり、

彼はそこに入ることを急ぎはしなかつた。断乎として、現代の行動の埒外に止つていた。……彼は決して政治を求めては行かなかつた。——ところが、政治が彼を求めて来た^(註3)。

と述べて、ファシズムの支配が、強引に滲透して来るさまを描い

ているが、このように三〇年代には、自由を求め、犯されざる事を願う個々人の主観的希望を蹂躪して、政治を先鋒とした社会的諸力が人間のあらゆる営みを併呑しようとしたのであつて、文学・芸術の世界といえどもそのお目零しに与ることは出来なかつた。また、たゞ単にイタリアやドイツに於いてのみならず、自由主義の牙城たる英国に於いても、この傾向はひし／＼と感じられたのである。ヴァジニア・ウルフ(Virginia Woolf 1882—1941)が、

He [the artist] is forced to take part in politics.^(註4)

と言つたのは、英国も決して台風圏外ではなく、文学・芸術に携わる人々にも、そのような支配の手が迫つて来た事を、鋭敏な女流作家の触角で感じとつたものにほかならない。英国に於いては、由来、文学は詩を先頭として人間の運命の開拓者となる伝統があり、詩の批評家が同一人物に於いて社会の批評家である事も決して珍しくないのであるが^(註5)、この伝統を受けて英国の詩人・作家・批評家達は、その姿勢に各人各様の差こそあれ、三〇年代のこの危機的様相を、自己に提示された最重要な課題として受け取つたのである。

小稿で考察の対象とするハーバート・リード(Herbert Read 1893—)も「はやぐも」一九三〇年^(註6)『University of Washington Chapbooks, No. 37』Julien Benda and the New Humanismと題する論考を寄せて、フランスの批評家ジュリアン・バンダ(Julien Benda 1867—1956)を紹介しつつ、時代の動向について予言的な警告を発している。リードはその論考に於いて、彼がバン

ダの著作の中で“most important book”^(註6)と評価する *La Trahison des Clercs* について論じているが、その要旨は、“clerc”即ち “disinterested thinker”^(註7)の消滅への歎きである。

La Trahison … というこの書のタイトルが示すように、何ものにも囚われない自由な思索をその職務とすべき思索人達、即ち現代の「聖職者」^(註8)達が、裏切者の如くに、相次いでその持ち場を放棄し、“interests of political passion”^(註9)に身を委ねている事を、バンダは口を極めて非難するのであるが、リードは徒にバンダの非難に同調することなく、その事よつて来る所以に思を馳せ、自由な思索人の存在を許容し得ざるに至る。近代国家の方向転換と、その末路のカタストロフィを見抜いて、予言者的な洞察を述べている。次にそれを見よう。

It is impossible to follow M. Benda into all the details of his charges against the modern clerks; …… The new faith of the clerk is, in large part, a result of the social conditions, which are imposed upon him, and the true evil to deplore in our time is perhaps not the treason of the clerks, but the disappearance of the clerks, the impossibility of leading the life of a clerk in the world as it is. The function of the clerk, of the disinterested man of learning, is, however, essential to the very existence of the state, and a state which does not make his position secure will inevitably revert to barbarism. (註10)

しかし、リードはバンダの主張には十分耳を傾け、その忠告に従つて嵐の時代を生き抜こうとしたのである。かくて数年を経、ファシズムの横暴が次第に募り、大戦の前夜を迎えた一九三八年、リードは上述したような伝統的使命をもつ英国の詩人・作家・批評家の一人として、自分に提示された課題への解答書とも言うべき *Poetry and Anarchism* を公にしたのであるが、その中で再びバンダの *La Trahison des Clercs* に触れて、次のように述べている。

I shared his [Benda's] desire to occupy a detached position; quite simply, to be left alone to get on with my job as a poet, an intellectual, a 'clerk.' (p. 75)^(註11)

かような、リードの主観的意図にも拘らず、客観的情勢はきびしかった。既に三〇年代初頭に、鋭い洞察力でもつて、社会的諸力の変質とそれが詩人・作家・批評家を含めて知性人全般に及ぼす影響を把握したリードではあつたが、「囚われない立場」の保持には成功しなかつた事を告白し、

Unfortunately, as Benda admitted in his book, modern economic conditions scarcely permit the clerk to fulfill his function. (p. 75)

と、いふ厳肅な事実を確認しなければならなかつた。かゝる体験は更にリードを導いて、次のような「一般的法則」の認識に至らしめる。

Trotsky has said that all through history the mind limps after reality. It is another way of saying that the intellectual cannot avoid the economic conditions of

his time; he cannot ignore them—for they will not ignore him. In one way or another he must compound with circumstances.... The material organization of life is the basic fact: to that extent an intellectual can accept the marxian dialectic. (pp. 75-76)

このような体験と認識とを踏まえ、近代国家のイデオロギーの鬼子として生れたファシズムおよびそのマンチテーゼとして出現した共産主義の動向に、深い注意を払った思索の結果が、*Poetry and Anarchism* の中には集約的に表明されている。“poetry”は即ち文学的主題であり、“anarchism”は社会的主題にほかならず、*Poetry and Anarchism* とが、この二つの主題、文学と社会との問題を相互に関連させ、包括的に考察した結果の“a personal confession of faith” (p. 58) と冠せられるにふさわしい呼び名である。

先廻りして示せば、
To make life, to insure progress, to create interest and vividness, it is necessary to break form, to distort pattern, to change the nature of our civilization. In order to create it is necessary to destroy; and the agent of destruction in society is the poet. *I believe that the poet is necessarily an anarchist*, and that he must oppose all organized conceptions of the State, not only those which we inherit from the past, but equally those which are imposed on people in the name of the future.

(The italics are mine.) (p. 58)

というのが、リードの結論的な所信であるが、これは、とりもなおさず、かくてこそ、詩が、文学が真実に生き得ると彼の信ずる方向を指し示すものである。一つ前の引用文に立ち返れば、リードは「環境と折り合いをつけなくてはならない。」つまり、宙に浮いたような、「囚われない立場」は存在しないという苦い認識に到達したのであつたが、それから更に進んで、こゝでは、「詩人は必然的にアナキストである。」つまり、詩人は、かえつて、アナキズムという一つの立場に身を寄せて、「あらゆる国家の既製概念」に反抗しなければならぬという転身を宣言しているのである。これは、しかし、文学を棄ててアナキズムを採る事、詩人たる事を放棄してアナキストに転生する事を意味するのでは勿論ない。詩人即ち文学的主題の体現者が、アナキズムに拠る事は、「聖職」を蔑ろにし、裏切りを行うのではなくて、社会的諸情勢の赴くところ、「囚われない立場」の許されぬ危機の時代の真直中にあつてもなお、バンドラの言う“clerc”としての責務を果し得るとの見解、否、むしろ、そのような立場を創造し、「聖職者」としての機能を回復する第一歩を踏み出すものであるとの見解にほかならない。

身を削るような幾年かの思索と体験の後に、三〇年代の危機感もその最高潮に達した時にあたつて、この信条を告白したリードの口調は、次に見るように、一途に思い詰めたかのような響を帯びつつある。

There only remains the path I have chosen: to

reduce beliefs to fundamentals, to shed everything temporal and opportunist, and then to stay where you are and suffer if you must. (p. 61)

しかし、私達は先廻りして結論を見ていたのである。「残れるはただひと筋、この道のみ」とまで彼が思い詰めているその道が、アナキズムと言ういさゝか奇異に聞えるものであるが故に、彼がそこに辿りつく道程を明かにして、それが狂信でない事を知り、又、確信の度は高くとも、実践態度としては消極的に見えるこの考え方から、大戦末期および戦後の積極的なあり方が如何にして生れて来たか、つまり「叛骨」の結晶過程に光を当てるように、筆を進めて行き度い。

(註2) 中村哲ほか編「政治学事典」。平凡社。「近代國家」の項参照。

(註3) ロマン・ロラン、宮本正清訳「魅せられたる魂」。

(岩波文庫) Vol. IX, p. 16

(註4) Virginia Woolf: 'The Artist and Politics' (1936),

The Moment and Other Essays. (Uniform Edition).

London, The Hogarth Press, 1952. p. 182

(註5) 深瀬基寛「現代の英文学」(アテネ文庫) pp. 5-6 参照。

(註6) Herbert Read: *Essays by Herbert Read.* (研究社現

代英文学叢書) p. 150

(註7) *Ibid.*, p. 151 参照。

(註8) *Ibid.*, p. 155

(註9) Herbert Read: 'Poetry and Anarchism', *Anarchy and Order.* London, Faber & Faber, 1954. p. 75.

Poetry and Anarchism は、小稿では 'Essays in Politics' のサブ・タイトルを附せられているリードの自選評論集 *Anarchy and Order* に収載されたものに依った。以下、詩を除いた引用文末尾の数字は本書の頁数を示す。

II

一九二〇—三〇年代に、次第にその姿をはつきりと現われ来り、第二次大戦に於いて角逐し合うに至る、経済・政治・思想の体系は、資本主義、ファシズムおよび共産主義(註10)の三つに大別出来る。リードを取巻く世界の様相を概観するに当つては、私達はその危機の元兇であるファシズムに主として注目したのであるが、リードが考察の対象をそれに限つていたのでない事は上述した通りである。彼はこの三つの潮流を夫々姐上に上せているのであるが、私達は先ず、リードの母国英国に於いて、最も典型的に発達して来た資本主義についての彼の批判から検討を始めよう。

嘗てカーライル (Thomas Carlyle 1795—1881) が "cash-nexus" と呼んで歎いた資本主義の仕組みを、リードは "net of mental debauchery" (p. 72) ときびくけ、 "standardization of taste" (p. 72) を "imposition of material values" (p. 72) とをその属性として呪つてゐる。しかし、資本主義の資本主義たる所以は、その拜金主義の本質にも拘らず、それを隠掩して、表向き文学・芸術の精神的価値を踏みにつたりする気配を見せない老獪さに存するのであるが、それを指摘しないで済すようなり

一とびかき。

Capitalism does not challenge poetry in principle....
it merely treats it with ignorance, indifference, and
unconscious cruelty. (p. 63)

かような次第であるから、典型的な資本主義国たる英国に於ける詩人の地位は、

In England poets are not regarded as dangerous
individuals....merely as a type that can be ignored.
Give them a job in an office, and if they won't work let
them starve.... (p. 62)

といった哀れなありさまである。それ故に、英国に於いては経済的繁栄にも拘らず、文学芸術の顧みられない事甚しいものがあるとして、特に 'Why We English Have No Taste' と題する一章を設けて探究の歩を進め、それはすべて資本主義が齎した禍いであると共に述べつつある。

To say that England, during the last four hundred
years, has shown the least evidence of artistic taste is
therefore but another way of saying that during the
same period England has been the most highly developed
capitalist state. (p. 69)

しかし、これを見れば、リーズが、下部構造は直接に上部構造を規定するという風な、平板な考え方をしたものと速断してはならない。それに續いて、

But such a simple materialistic explanation will

not altogether suffice to explain the facts. (p. 69)

と言つてリーズである。このような場合に屢々引き合いた出される清教徒主義の功罪についても勿論言及しているが、フロイド (Sigmund Freud 1856—1939) の影響を強く受けているリードのごとく、心理学的な要因を大きくとり上げている。そして通常英国人のよき特質として称讃される "common sense" や "sense of humour" が手厳しい批判を加えられ、この二つで練り上げられてた "gentleman" が槍玉に上つて痛快である。リードに依れば、それらはすべて "normal" なるものを理想化して祭り上げ、それからの逸脱を揶揄し、それを達成せんとして競い合う事から来ているのであるが、行き着くところ、その傾向は社会全体に弥漫するノイローゼ、つまり病的症状を呈するようになり、豊かな生の現実への不感症を惹起する。而もこのノイローゼたるや、英国人が "castle" と誇る "home" に於いてその絶頂に達するとは、何とも皮肉な事である。このようにして、英国人の感受性は完全に萎えてしまったのだとリードは言うのであるが、この傾向の発生、増大は全く資本主義の歴史と重り合い、その影響下にあって、清教徒主義と裏表をなすものである事を指摘して、

We are the victims of an historical process, and our
lack of taste is merely our lack of social freedom. (p.

72)

と彼は慨嘆する。それ故に、彼が次のような結論のもとに、この一章(註二)を結ぶのも当然な事である。

Therefore the cause of arts is the cause of revolution. (p. 73)

このようなリードの所論を述べ、彼が既にアナキズムを指向している事がわかる。どういふのは、彼の構想するアナキズムは、次に示すように、資本主義体制の解体を通じて、“freedom”の回復を目指すものだからである。

The essential principle of anarchism is that mankind has reached a stage of development at which it is possible to abolish the old relationship of master-man (capitalist-proletarian) and substitute a relationship of egalitarian co-operation. (p. 92)

Modern anarchism is a reaffirmation of this natural freedom..... (p. 108)

しかしながら、英国に於ける資本主義の批判を通じて、社会改革の必要を痛感し、アナキズムを指向したといつても、リードも直ちにそれが唯一の道であると確信したわけではない。東の方に赤い星が出現し、次第に中天高く上り行くのが見えただからである。他の多くの知性人達と同じく、リードもこれに望みを托したのである。彼の期待の声を聞かば。

.....communism as established in Russia seemed to promise the social liberty of my ideals. (p. 57)

そして、彼は同情的な眼で成行を観察する。

Some of its failings are admittedly of a transitional nature, and others can be set off against the manifold benefits which communism has brought to the Russian

people. (pp. 95—96)

しかし、この期待も潰え去る時が来た。

But when five, ten, fifteen, and then twenty years passed, with the liberty of the individual receding at every stage, a break became inevitable. (p. 57)

リードが述べているように、個人の自由(註1)という立場に拠り、それを必須の前提条件とする文学・芸術の観点から見れば、ロシアに樹立された現実の国家体制——リードはそれを共産主義の理想と懸隔する事甚しいものがあると考えたようになった(註2)——は、一致する点をめぐるのである。

At this point, marxism and fascism, the prodigal and the dutiful sons of Hegel, meet again; and will inevitably become reconciled. There is not the slightest difference, in intention, in control and in final product, between the art of marxist Russia and the art of fascist Germany. (p. 64)

ここでリードが巧妙な比喩で示しているように、マルクシズムもファシズムもイデオロギーの面ではヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770—1831) に連つてゐる事が一致点をめぐる至る理由である。ヘーゲルの哲学に於いては、周知のように、精神界のヒエラルヒーの中で理性が最高の地位を与えられ、その絶対理性の客観世界に於ける体現者として、国家に絶対的な権力が委ねられる。それゆえに、イデオロギーの面にあつては、芸術は理性に従属する地位を与えられるに過ぎず、現実の社会に於いて

は、芸術は国家の奴婢として、その頤使に従わざるを得ぬ立場に陥し入れられる。それがロシアの現実であり、ファシズム国家にあつては、事態は更に深刻なものがある。とリードは判断する(註14)。

資本主義が文学・芸術を遇する態度を検討した際に、「正面から詩に刃向つて来るわけではないが、詩を無視し、度外視し、無意識的な残忍さでいためつける」という意味の言葉で、リードがその本質を暴露した事を、私達は既に見て来たのであるが、今ここに、ロシア、ドイツ、イタリア等に於ける事態を彼は明かにしたのである。それらの国々に於いては、——リードの右の言葉と対照するために、敷衍を加えて示せば——「詩は無視されたり、度外視されたりはしないが、国家によつてこき使われたり、真正面から意識的な迫害を加えられているのだ。」(註15)憎むべきかな、国家権力の横暴、

ここに至れば、リードの進む道が一筋に、一直線にアナキズムに通じている事は明かである。というのは、彼に従えば、アナキズムとは、

Anarchism means literally a society without an *arkhos*, that is to say, without a ruler. It does not mean a society without law, and therefore it does not mean a society without order. (p. 129)(註16)

つまり、「支配者なき社会」を旨とするものだからである。

それでは、「支配者」とは何か？それは私達がリードの思想を辿つて来た過程に於いて明かにしたように、人間の外部に於いては、金銭の力であり、社会的圧力であり、政治の支配力であり、

内部にあつては潜在意識的抑圧(註17)である。かくて、アナキズムとは、これらすべての支配者から人間が解放され、真実の意味で主体性を回復し、まことの自由を確立することを旨とするものである。このような社会が実現されてこそ、詩は、文学は、芸術は、はじめて、その翼を伸びやかに拡げて、自由の大空に舞うことが出来るというのがリードの論旨である。私達が既に接したリードの結論、「詩人たるものは必然的にアナキストである。」——この信念が生れて来るのも宜なるかなと言ふべきである。ここで、このⅡ部の冒頭に立ち返り、私達が、争い合う国家群を三つに分類した事を思い出して、それに対するリードの総括的な診断の言葉を聞こう。

In England or in Russia, in America or in Germany, it is the same: in one way or another poetry is stifled. what I really mean is that the doctrinaire civilizations which are forced on the world——capitalist, fascist and marxist——by their very structure and principles exclude the values in which and for which the poet lives. (pp. 62—63)

現存の社会体制はすべて「このやうな」文学・芸術を窒息せよ、詩人の生存を不可能ならしめるものである。ところが、リードは逃避の道は残されてない。

..... there are many young artists today whose only desire is to escape to some fertile soil under a summer sky, where they may devote themselves entirely to their art free from the distractions of an insane world. But there is no escape. Apart from the practical difficulty

of finding a secure refuge in this world, the truth is that modern man can never escape from himself. He carries his warped psychology about with him no less inevitable than his bodily diseases. (p. 61)

心理学的要素を忘れぬところ、リードらしい見方であるが、なお一層重大な事は芸術家と社会との関係である。

But the worst disease is the one he creates out of his own isolation: uncriticized phantasies, personal symbols, private fetishes. For whilst it is true that the source of all art is irrational and automatic.... it is equally true that the artist only acquires his significance by being a member of a society.... To escape from society (if that were possible) is to escape from the only soil fertile enough to nourish art. (p. 61)

それゆゑに、逃避は——若し出来たとしても——自殺にも等しい。そこで、一部の終りで私達が見たような、「今いる所に留ること」という結論が出るのであるが、それでいて、詩人・芸術家として生きようとすれば道はたゞ一つ、アナキズムのみ。リードはまさに背後の橋を焼き、背水の陣を布いたのである。しかも、ファシズムの横暴によつて、ヨーロッパの文化が潰滅するかも知れぬという懸念が日に日に濃くなつて行くではないか。リードの思い詰めたような切迫感はこの根差している(註10)。

その間にも、世界史の歩みは足を早め、一九三九年九月、第二次大戦の火蓋は切つて落されたのである。リードは「社会に於け

る破壊の動因は詩人である」という激しい一面を示しつつも、「今いる所に留つて、必要とあらば、苦しむこと」という、消極的な態度(註10)のまゝで、戦火に直面したのであつた。

(註10) このような分類は便利であり、リードもそれを採用しているが、厳密に言えば、ぼやけた点がある事をことわつておきたい。資本主義とは、近代國家を支えている経済・社会的基礎構造を主として指すのであり、そのイデオロギイ的側面は自由主義である。ファシズムはイデオロギイ的には自由主義に眞向から対立するが、その経済的・下部構造は依然として資本主義である。

(註11) H. Read: *Op. cit.*, pp. 67-73

(註12) 「個人の自由」といふのも、ここで再び近代國家のイデオロギイに戻つて行くといふ循環論に陥つてゐるのではない事を、リードの言葉によつて示した。

Intellectual liberty—the liberty to pursue individual trends of thought and to publish these for the interest or amusement of our fellow men—is not defended by me in a spirit of vague idealism. The political ideology of liberty is liberalism, or *laissez-faire*, which is the doctrine most suited to a predatory capitalism. (H. Read: *Op. cit.*, p. 83)

(註13) H. Read: *Op. cit.*, pp. 99-96 参照。

(註14) H. Read: *Op. cit.*, pp. 63-64 & p. 83 参照。

(註15) But in Russia, Italy, Germany, as still in fascist

Spain, there was neither ignorance nor indifference, and cruelty was a deliberate persecution leading to execution or suicide. (H. Read: *Op. cit.* p.63)

(註16) これは *Poetry and Anarchism* からの引用ではなく、それと続く *Anarchy and Order* の中に収載された *The Paradox of Anarchism* の最初の頁に見出される言葉である。

(註17) 「支配者」の中に、フロイド心理学的なものが含まれる事については、本文の中では十分明かにならなかったのび、次にそれを明示するリードの言葉を引いておく。

I would define the anarchist as the man who, in his manhood, dares to resist the authority of the father; who is no longer content to be governed by a blind unconscious identification of the leader and the father and by the inhibited instincts which alone make such an identification possible. (H. Read: *Op. cit.*, p.96)

(註18) *Poetry and Anarchism* の抜粋の中には、ポロツキンの世界情勢に鑑みて、アナキズムが彼一個の独断的・恣意的な空想ではなくて、理性的なものであり、実現可能なものである事を立証しようとしている。次を参照。

Anarchism is a rational ideal—an ideal common to Marx, Bakunin, and Lenin. (H. Read: *Op. cit.*, p.103)

Since Kropotkin's time anarchism has evolved to meet modern conditions, and as a practical policy is known as syndicalism;.... (H. Read: *Op. cit.*, p.99)

原書の41 'The Prerequisite of Peace' なる一章を設け、

There is no problem which leads so inevitably to anarchism [as this problem of war and peace].

Peace is anarchy. (H. Read: *Op. cit.*, p. 121)

と、アナキズムこそが平和を確保する唯一の道であるとの信念を詳述しているが、このような点でも、危機の時代の問題を自己に提示された課題として受け取った英國詩人の一人としてのリードの、その課題への解答書と私が呼ぶこの *Poetry and Anarchism* の真面目の片鱗が窺われるのである。又確信の強さに應じて、切迫感の度が高まることも理解出来るであろう。

(註19) このような態度を示す言葉は、*Poetry and Anarchism* の中に随所に散見している。例えば、

Imagination renders a man incapable of determinate action; determinate action inhibits imagination—such is the dialectic of the human personality. (H. Read: *Op. cit.*, p.103)

He [the poet] is a creature of intuitions and sympathies, and by his very nature shrinks from definiteness and doctrinaire attitude. (H. Read: *Op. cit.*

p. 74)

これらの中のあるものは、明かに、押しよせて来る社会的諸力への抵抗であるが、反面「囚われない立場」の意識を拂拭し切つてゐる事、“no-man’s-land of his imagination” (H. Read: *Op. cit.*, p.74)への郷愁を示すものでもある。

III

この私達は *Poetry and Anarchism* から *Collected Poems* (註2)に移り、大戦中のリードの詩を通じて、彼の内面的世界の動きを辿ることにしよう。

西欧のたそがれを思わせる気配のうちに、戦端は開かれた。

In the silence of the twilight

I hear in the distance

the new guns. (p. 88) — ‘Ode written during the

battle of Dunkirk, May, 1940

それはまことに無意味な、たゞ残忍と恐怖とのみの地獄絵巻を繰り抜けるに過ぎない戦争である。それを聖戦にみせかけるために掲げられた戦争目的なるものは、すべて空虚なこけおどしに過ぎない——このことはファシズムは勿論のこと、自由を守ると称する陣営にも、人民のためと看板を掲げる陣営にも手厳しい批判を下したリードの眼には一目瞭然である。

The kind of war is chang’d: the crusade heart

out-shatter’d: flesh a stain on broken earth

and death an unresisted rain.

The horror loos’d all honour is lost. (p. 81) — ‘War and Peace’

嘗ては戦いをロマンチックな夢に包んだこともある英雄的なものの形骸だけ見当らないばかりでなく、殺し合う人間の姿が獣類以下に見えて、救いのない絶望にリードは身悶えする。

.... we who have put our faith
in the goodness of man

and now see man’s image debas’d

lower than the wolf or the hog—

Where can we turn for consolation ?

(p. 91) — ‘Ode written during the

battle of Dunkirk, May, 1940

そして、事ここに至るまでの、第一次大戦このかたの二十年の歳月を振りかえり、リードは悔恨の念に胸をいためる。どうやら、その問は見る見るのち

Belief without action

action without thought

the blind intervention

of years without design.

.....

faith formulated but not maintain’d

twenty years

without design.

(pp. 89—90) — ‘Ode written during

the battle of Dunkirk, May, 1940

にすぎないからである。「行動なき信念」が如何にむなしきものであつたか。「胸のうちに抱懐されつゝも、断乎として表明されざりし信条」の如何に甲斐なきものであつたか註21。今こそ、それを思い知つたリードは、戦雲の晴れ上るのを待つ間にも、苛立たしきをおぼえ、行動への呼びかけを心の内に聞く。

But even as you wait

like Arjuna in his chariot

the ancient wisdom whispers:

Live in action. (p. 84) — 'The Contrary Experience'

しかし、われと我が心で、

Persevere through despair.

(p. 92) — 'Ode written during the

battle of Dunkirk, May, 1940'

と言ひ聞かせるリードであつた。

やがて、戦争終結への見通し、しかも、少くとも、あの兇悪なファシズムの手にヨーロッパが委ねられるのではないとの見通しのつく、一九四四年に至つては、リードは高らかに行動への決意を歌うのである。そして、彼にとつて理想の世界を築くための行動とは、アナキストとしてのそれである事は言うまでもない。

Vision itself is desperate: the act

Is born of the ideal: the hand

Must seize the hovering grail.

.....

..... We shall act

We shall build

A crystal city in the age of peace

Setting out from an island of calm

A limpid source of love.

(pp. 99—100) — 'A World within a War'

一九四五年四月、大戦いまだ終結に至らない時、フリーダム・プレスに加えられた英国戦時内閣の弾圧註22の手に抗して自由防衛委員会 — Freedom Defence Committee — の委員長として立ち上つたリードの決然たる態度の背後には、この決意がひそんでいるのである。

ベルリンは陥落し、ナチ政権は崩壊し、平和が甦えつた。人々の期待を担つて国際連合が誕生した。しかし、リードの思想を検討した私達には既に明かであるが、この資本主義国家群と共産主義国家群との、呉越同舟的な寄り合い世帯は、リードの眼には茶番狂言にも等しいものとして映じたことであろう。人々は、しかし、飢餓にやせ衰え、引裂れた衣をまといながらも、平和の声に酔いしれて、噴火山上の舞踏を続ける。リードは危惧の念に堪えないのだ。 *Collected Poems* 末尾の 'Envoy' をなす '1945' という一篇は、精神的に、物質的に、飢餓に迫られた人々が、滋味豊かな「サンファイア」草とも見えるものを掴んで喜んでいるさまを描き、そのしからざる事への警告——本当の平和、真の自由はいまだ到来したのではなく、人類の背後には、資本主義或は共産主義等の「支配者」が打寄せる大波の如く迫つて来ているのだという警告であると解すべきであり、反面、この現状を眼前にして

新しい世界についての予言的確信と情熱とに溢れたリードは、積極的な活動への決意をますます固めたのだと見るべきであろう。短い詩であるから、その全体を示したい。

They came running over the perilous sands

Children with their golden eyes

Crying: *Look ! We have found samphire*

Holding out their bone-ridden hands.

It might have been the spittle of wrens

Or the silver nest of a squirrel

For I was invested with the darkness

Of an ancient quarrel whose omens

Lay scatter'd on the silted beach.

The children came running toward me

But I saw only the waves behind them

Cold, salt and disastrous

Lift their black banners and break

Endlessly, without resurrection. (p. 199) — '1945'

冷く、呵責なき荒波の襲撃から、身を挺して、「子供達」守らねばならないとの決意を、リードの胸のうちにいやが上にも高められるものには、更にもう一つの要素がある。それは、彼自身も一歩兵将校として戦場に身を曝した第一次大戦が、全く無意味であったことへの、痛烈な憤りである。この二度目の、より凄惨な戦争

を、屠られたより多くの人命を、再び無意義なものと化してはならないとの強い願いである。第一次大戦の結果への批判は、*Poetry and Anarchism* の中にも見える(註23)が、詩の中には次のように現れている。

We went where you are going, into the rain and the
mud;

We fought as you will fight

With death and darkness and despair;

We gave what you will give—our brains and our blood.

We think we gave in vain. The world was not renewed.

.....

....Our victory was our defeat.

(p. 82) — 'To a Conscript of 1940'

眼の当りに見た、救いのない悲惨な戦争の様相、しかも戦い終つて甦つた平和もむなしいものであり、前大戦の愚を繰り返す恐れのあることを知りすぎるほど知っているリード、この彼の内部では、彼がこれこそは「残された唯一の道」と確信するアナキズムを、決然と実践の面にまで強力に押し出す何物か——これを「叛骨」と呼んでもよいであろう——が、金剛石のように形作られてきたのである。

(註20) Herbert Read: *Collected Poems*. London, Faber &

Faber, 1946. 以下引用詩文の末尾に附した数字及び文字は、

本書の頁数およびその詩のタイトルを示す。

(註21) *Poetry and Anarchism* 中の、リードの次の言葉を

参照。

I am thus open to a charge of having wavered in my allegiance to the truth. In extenuation I can only plead that if from time to time I have temporized with other measures of political action—and I have never been an active politician, merely a sympathizing intellectual—it is because I have believed that such measures were part way to the final goal, and the only immediately practical measures. (H. Read: *Op. cit.*, p. 57)

(註22) この事件に関する詳細は左記を参照。

増野正衛「文学の政治的必然性—ハーバート・リードのアナキズムについて—」。京都、山口書店発行「海潮音」Vol. IV, pp. 15-20

(註23) H. Read: *Op. cit.*, pp. 74-75 参照。

おわりに

一九三〇年以後の、社会情勢とそれに応ずるリードの魂の遍歴とを跡づけて、私達は、彼が当初「何ものにも囚われない立場」を志向しつつ、それを求めて得られない情勢のもとにあつて詩人として生きるため、「残された唯一の道」としてアナキズムを採つた事を知つた。そのアナキズムに対する彼の態度も、「囚われない立場」意識の残滓の附着した消極的なものから、第二次大戦の経過のうちに、次第に行動意欲に溢れた積極的なものとなり、決然として対社会的行動に出るまでに変化したことも見た。このようにして、リードの「叛骨」は前面に押し出され、戦後の英国

文壇の鳥瞰図に於いても、人の眼を惹くことになつたのであるが、ここで増野教授の「叛骨の苗床」に立ち返れば、そこでは「叛逆の気質」(傍点は論者)つまり、精神的基礎構造の成育のさまが問題にされているようである。リードの「叛骨」の結晶過程に光を当てるといふ小稿の試みは、その基礎構造の上に展開された、彼の精神の具体的な発展のすがたに焦点を合せたものと言えようか。

(一九五八年十一月、日本文学会中四國支部大会に於いて発表したものを骨子として、それに全面的改訂を加えた。)

附言

ハーバート・リードといえは、私達はすべて、彼の“personality”と“character”との区別の論を思い起すのである。Poetry and Anarchism の中では、この事には一言も触れていないが、彼が「囚われない立場」を求め、「支配者」からの解放を望むのは、すべて、“personality”——この上へのみ文学・芸術の花は咲き出るとリードは論じている——の確保を目指すものであることは自明の理である。しかし、その彼の中に、次第にアナキズムへの確信が高まり、実践への決意が固まり、「叛骨」が結晶して来たとは、一種の“character”が芽生えて来たことを示すのではあるまいか。

彼がこの論を展開した“Personality and Character in Modern Poetry”(註1)の中には、次のゲーテの句が引かれている。

Es bildet ein Talent sich in der Stille:

Ein Charakter im Strome der Welt.

ゲーテの言う“Talent”とは“personality”にほかならないとリードは注釈を加えているが、私には、この二行が、小稿で考察した一九三〇年以後のリードの内面の変遷そのものであるように思われる。その前半は、“Stille”——「囚われない立場」——に於いて“personality”を確保し、詩人としての自己を全うしようとしたのであり、その後半は、それにも拘らず、“Strom der Welt”——しかも嵐の時代の奔流——のうちに引き入れられて、予期しない“character”が形成されて来たように思われるのである。

さて、ここに問題がある。というのは、リードは、一般に“character”¹⁾と“personality”とは逆に、詩や芸術作品の創造を阻むものであり、警戒せねばならないと論じているが、今迄に述べた私の見解がもしも正しいとすれば、当の彼自身は“character”の出現に会して、詩人としての自己をどの程度に全うしたのであろうか。一九四六年の *Collected Poems* 以後、詩集を出さぬ彼を見て、私は、彼の中にかくて形成された“character”²⁾が——具体的に言えば、詩人リードを押しつけて彼の胸中に蟠踞したアナキスト・リードが——詩の創作を妨げているのではないかと推定し^{註ii)}、それを人にも伝えたことがある。しかし、十年目の一九五六年に至つて、新しい詩集 *Moon's Farm and Other Poems* が公にされたので、この問題は、これについて検討せねばなるまい。私自身は、詩の価値を判定し、それによつて詩人リードを評価する能力の持主ではないことを告白

し、この問題についての御高見を、先学諸賢にお願いする次第である。

(註i) 一九三二年に出された *Form in Modern Poetry* の中のこの一章は、深瀬基寛編 *Essays by Herbert Read* (研究社現代英文学叢書) に収載されている。

(註ii) リードが、ミルトンやワーズワスの或時期に於ける詩的創作力の衰退を、それらの詩人の内部に形成された“character”の故だとしているのが思い合される。尤も、T・S・エリオットは、リードのこのような論を“advanced heresy” (*After Strange Gods*, p. 67. 参照) として斥けつゝる。